

第1章 添田町の概要

1. 自然的・地理的環境

(1) 添田町の位置

本町は、福岡県の東南端、福岡市及び北九州市から約40kmの距離に位置し、田川郡の最南端に位置する。町域は、東部はみやこ町、北部は赤村、大任町、川崎町、西部は嘉麻市、南部は東峰村、大分県日田市、大分県中津市に接する。

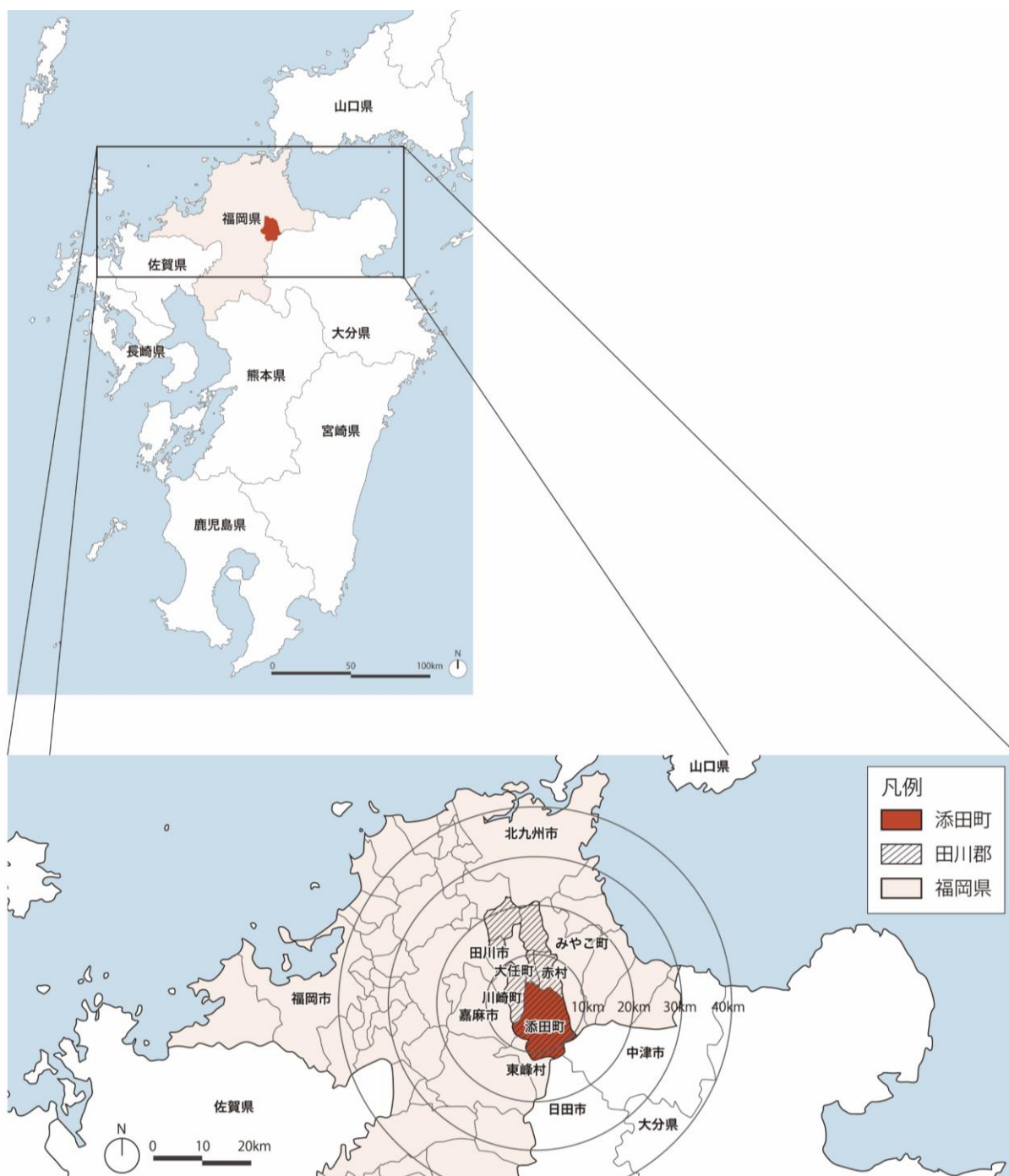


図 本町の位置

(2) 面積・地形

町域は、東西約13 km、南北約16 km、面積約132 km²であり、その多くを山林が占める。地形は、町の南部にある英彦山^{ひこさん}を主峰として、鷹巣山^{たかのすやま}や岳滅鬼山^{がくめきやま}等の山々が東西に連なり、そこから北へ丘陵地がのび、町北部の添田駅^{そへだ}周辺に平地が広がる。英彦山は標高1,199mを有し、晴れた日には南の方角に遠く阿蘇^{あそ}の山々を望むことができる。英彦山に連なる山々に登山道や九州自然歩道等が整備されており、老若男女を問わず気軽に登れる山として、一年を通じて多くの登山客が訪れている。

また、町域の北部に位置する岩石山^{がんじやくさん}は、ところどころに巨岩が露出する地形の険しい山である。山頂からは北西に位置する田川盆地^{たがわぼんち}を望むことができ、戦国時代に戦略上の要地として重視された。

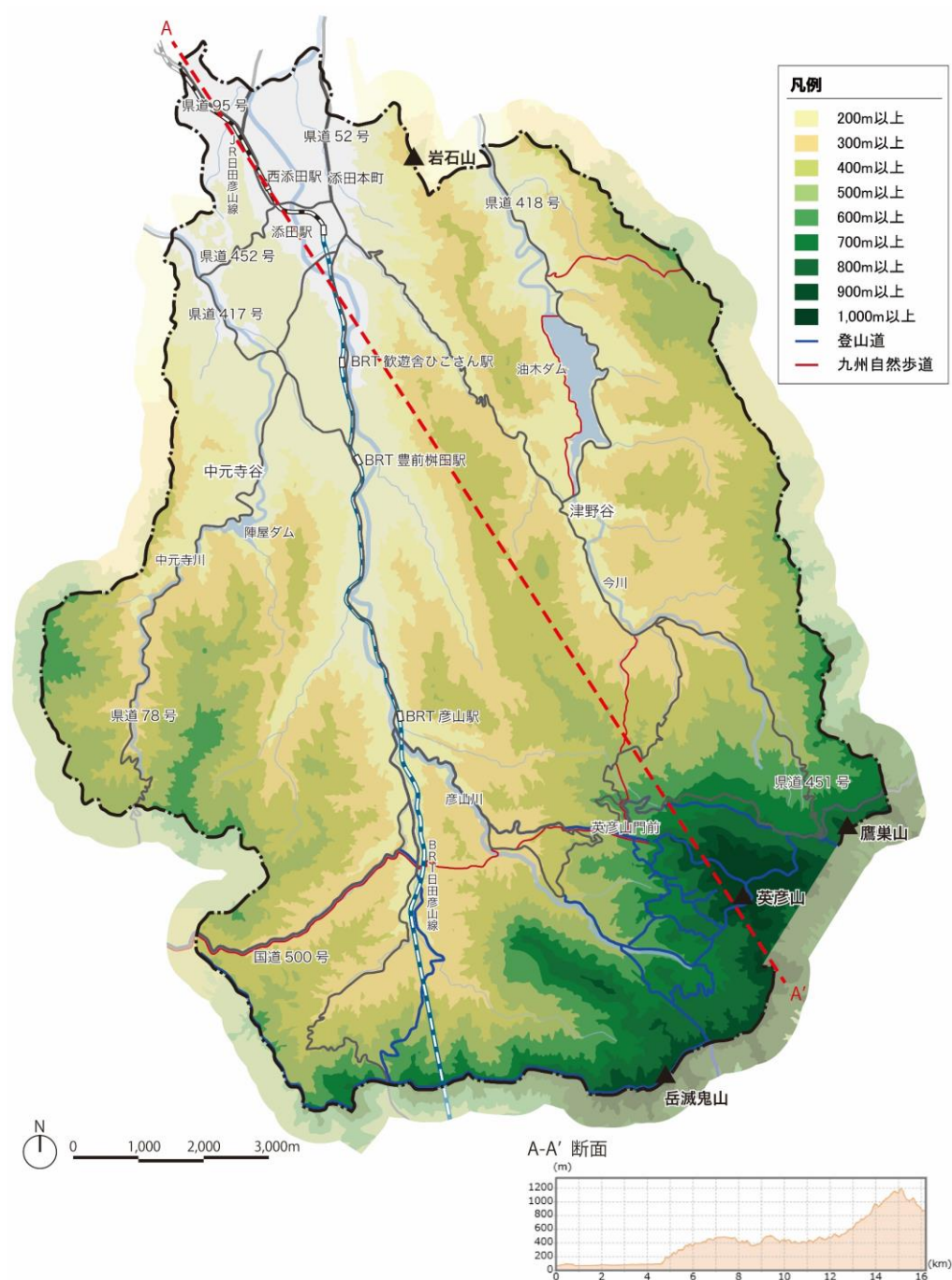


図 地形

(3) 水系

本町を流れる主な河川は、東側の津野谷を流れる今川、英彦山に源を発し、本町の中央を流れる彦山川と、本町の西南端の町境を源流とし、西側の中元寺谷を流れる中元寺川である。今川は、瀬戸内海南西端の周防灘へ、彦山川と中元寺川は、下流の福智町で合流して遠賀川となり関門海峡の北西の響灘へ注いでいる。英彦山は異なる海につながる水系の源流が存在する「大分水嶺」であり、国内で4ヶ所のみ確認されている*。

これらの河川は、英彦山一帯の諸山の水を集め、水量も豊富である。英彦山裾野までの山間部は高低差と狭隘な川幅により急流であり、平野部は比較的緩やかな流れである。

上流部は深い渓谷と河岸の桜や紅葉が織りなす絶景が各所にあり、季節ごとに違った風情を醸し出している。また、清流に多くの淡水魚が生息している。

町内に洪水調整やかんがい等を目的とするダムが2つある。昭和46年(1971)に今川の上流部にあたる津野地区に油木ダムが、昭和50年(1975)に中元寺川の上流部にあたる中元寺地区に陣屋ダムが完成した。

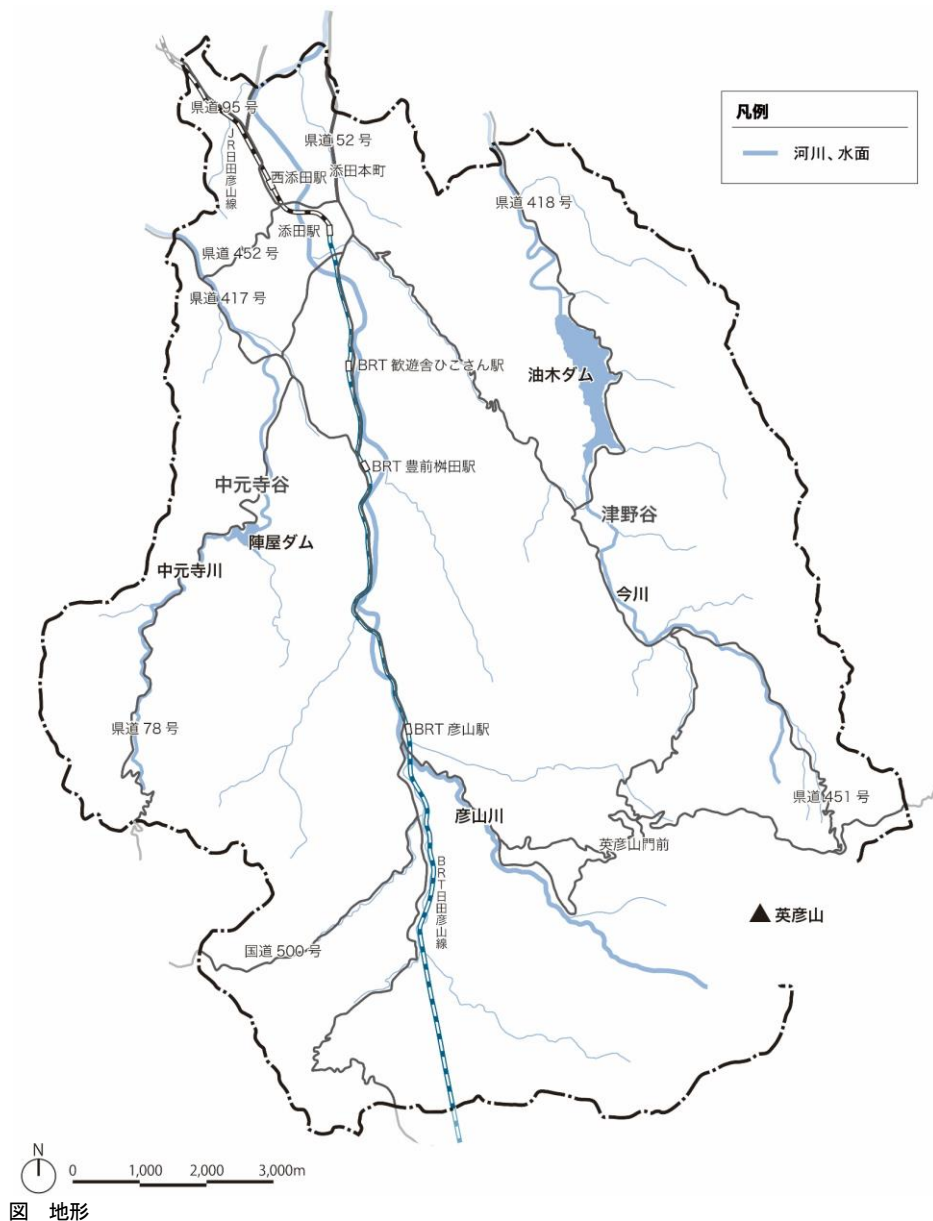


図 地形

* 他の日本の大分水嶺は、北海道北見市・上川町・上士幌町の境界付近、福井県・滋賀県・岐阜県の県境付近、熊本県阿蘇山付近である。

(4) 気象

本町は、平野部の添田駅周辺（標高約80m）から山間部の英彦山の山頂まで1,100m以上の標高差があり、平野部と山間部で気象条件が大きく異なる。

令和6年(2024)の平野部(添田)の気温は、年間平均気温16.8℃であり、夏季は最高気温が37.1℃まで上がる。一方、山間部(英彦山)の気温は、年間平均気温14.6℃、最高気温28.7℃と平野部よりも低く、相対的に涼しい。最低気温の月別の傾向は平野部と山間部で概ね同じであり、12月から3月までの冬季の最低気温は氷点下まで下がる。平野部は積雪はあまり見られないが、山間部は積雪量も多く、凍結等も著しい。

令和6年(2024)の年間平均降水量は、平野部(添田)の2,269mmに対し、山間部(英彦山)は2,563mmであり、一年を通じて6月から8月の降水量は多い。

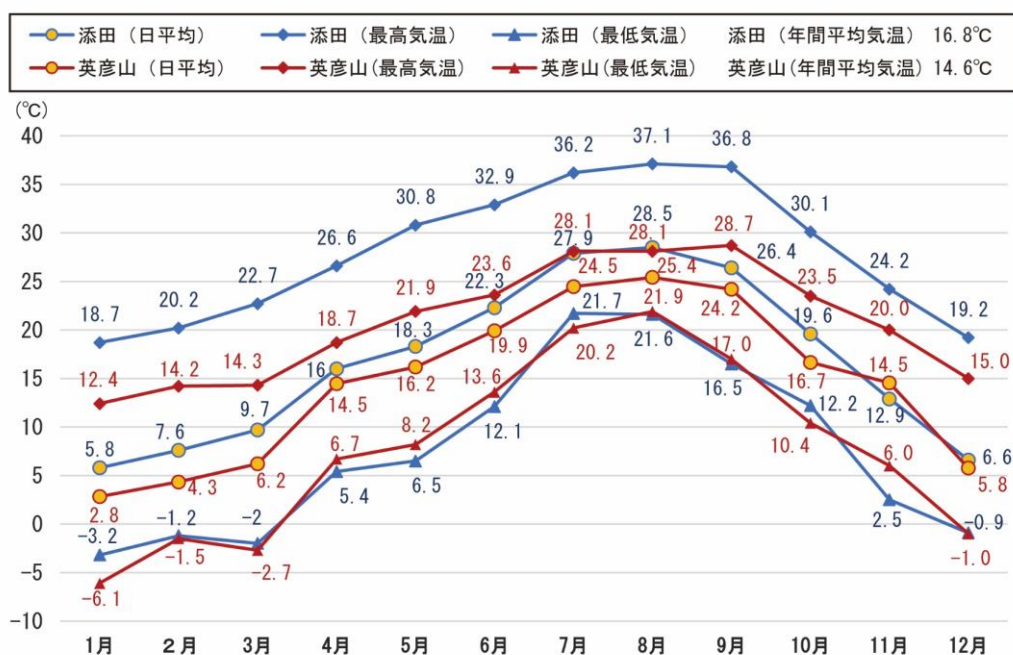


図 月別の気温 令和6年(2024)

【資料：添田／気象庁HP、英彦山：町資料】

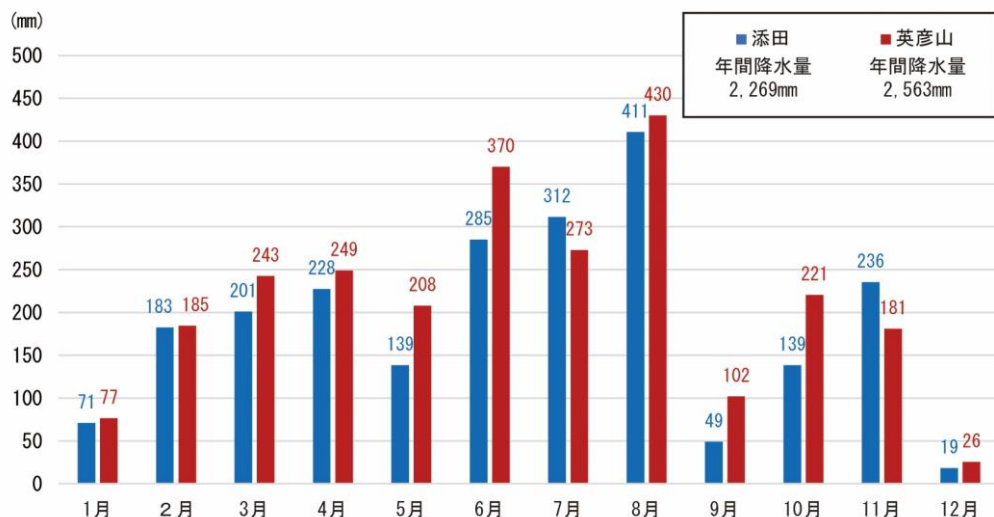


図 月別の降水量 令和6年(2024)

【資料：気象庁HP】

(5) 植生

本町は、添田駅周辺の平野部から英彦山の山頂まで1,100m以上の標高差があり、大きく2つの植生帯に分かれる。標高700mまではスギ・ヒノキ・サワラ植林を中心とする照葉樹林が分布し、それより高い場所にシラキ・ブナ群集やリョウブ・ミズナラ群集、イロハモミジ・ケヤキ群集を中心とした夏緑樹林が分布している。英彦山は、我が国屈指の霊山として自然が大切にされてきており、原生的な自然が広く存在する。また、英彦山は北部九州随一の高山であるため、ワチガイソウ、クロフネサイシン等の冷温帯植物の県内唯一の植生地で、福岡県で最も自然度の高い山域といえる。この豊かな自然環境が評価され、昭和25年(1950)耶馬日田英彦山^{やばひたひこさん}国定公園に選定されている。

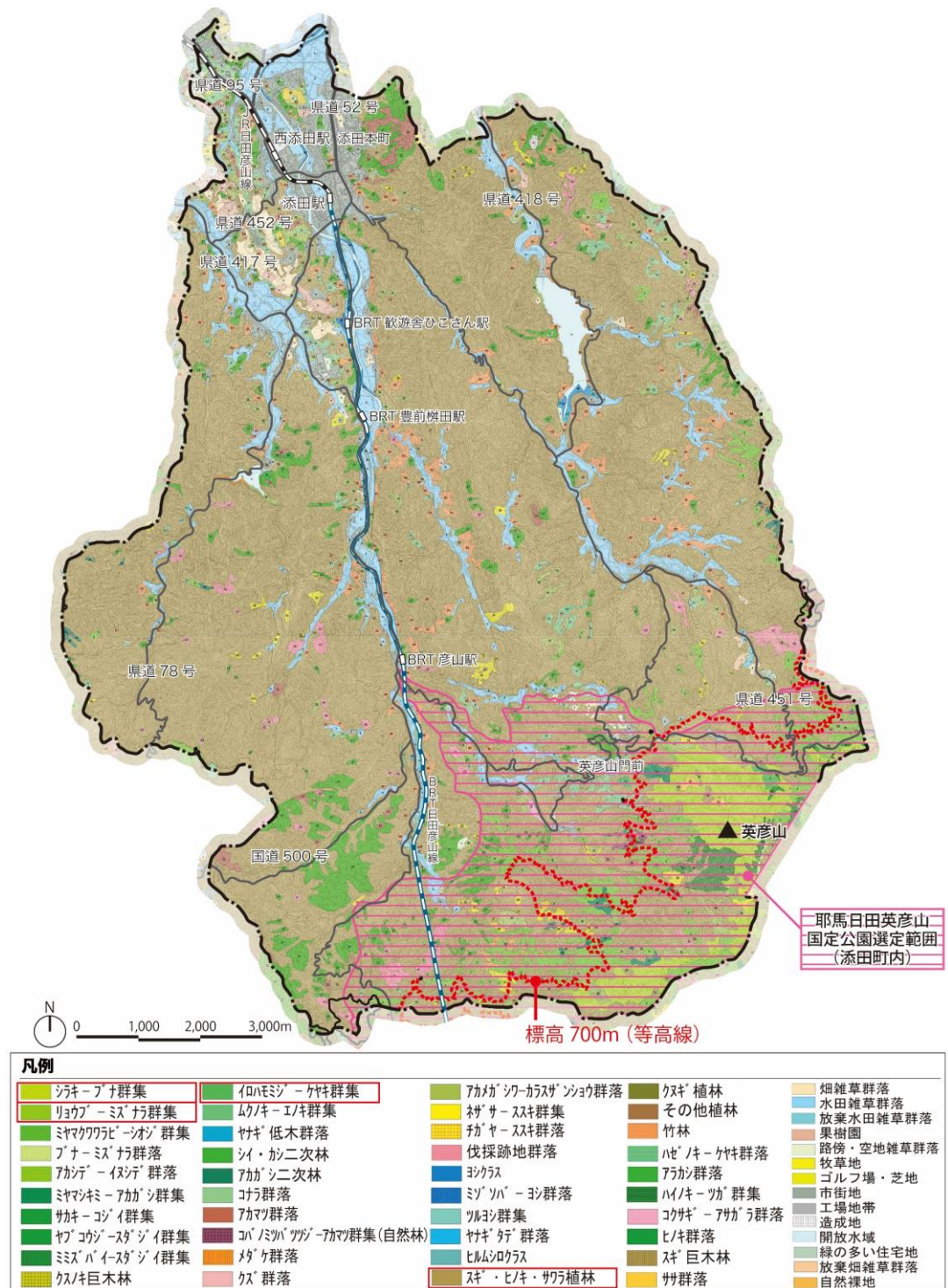


図 植生

【出典：自然環境保全基礎調査】

2. 社会的環境

(1) 町村合併の経緯・地名

本町は、明治22年(1889)の町村制施行により添伊田村、野田村、庄村が合併して添田村となり、明治40年(1907)に中元寺村と合併、明治44年(1911)に添田町となった。そして、明治22年(1889)に落合村、榊田村、彦山村が合併してできた彦山村と昭和17年(1942)に合併し、昭和30年(1955)に津野村と合併して現在の町域となっている。

現在の大字(添田、庄、野田、津野、榊田、英彦山、落合、中元寺)は、明治22年(1889)の町村制施行以前に存在した8つの村の名称に由来するものであり、町内の地名として日常的に用いられている。

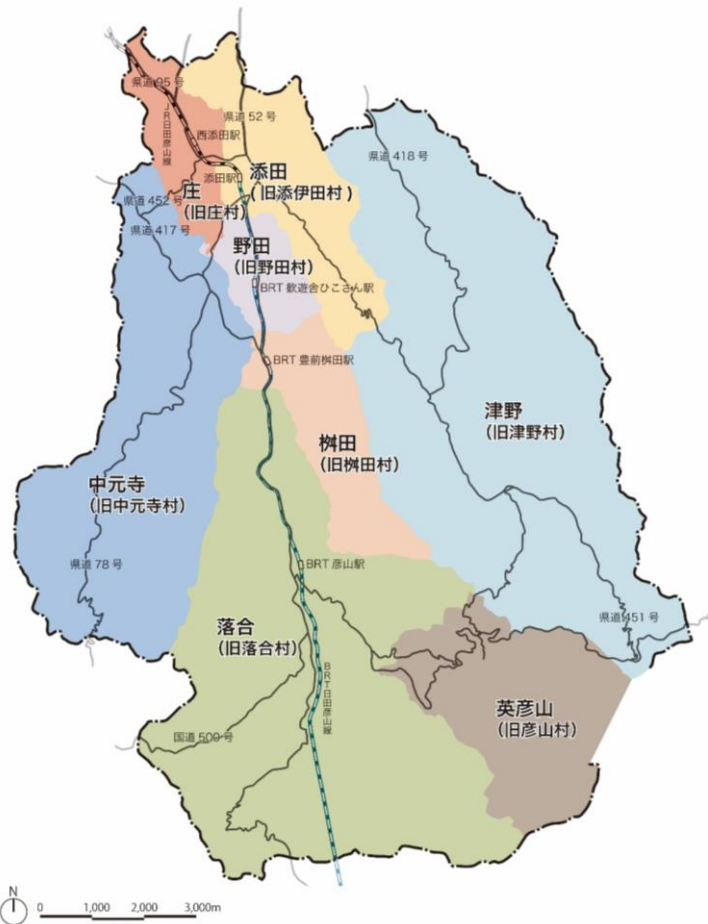


図 大字

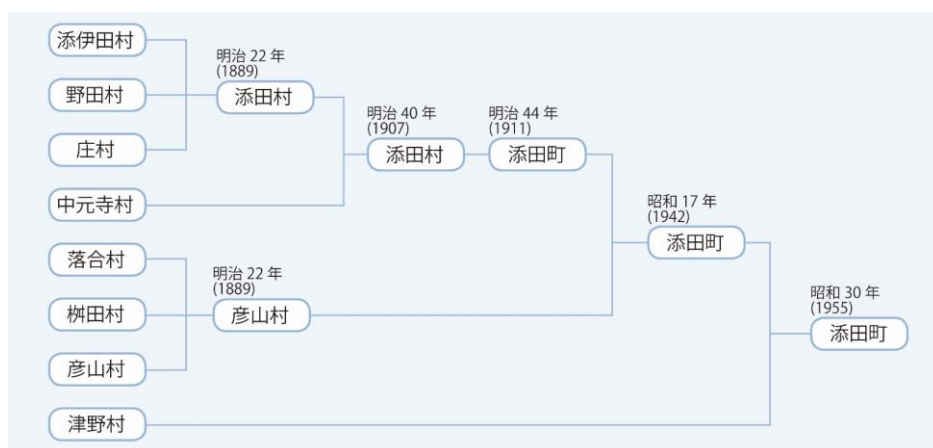


図 町の沿革

(2) 人口

本町の人口は、住民基本台帳では令和7年（2025）8月現在8,151人である。国勢調査による人口推移をみると、昭和10年（1935）以降、町村合併と石炭産業の発展により本町の人口は増加の一端をたどり、昭和30年（1955）に27,978人となった。しかし、エネルギー革命による昭和44年（1969）の炭坑完全閉山により、昭和45年（1970）の人口は最盛期の昭和30年（1955）から約11,000人もの急激な人口減少となり、それ以降も少子化や都市部への人口流出により徐々に減少している。令和2年（2020）時点の人口は8,801人であり、将来推計によると、令和27年（2045）の人口は4,612人である。

高齢化率は上昇傾向にあり、昭和60年（1985）の18%から令和2年（2020）に45%となり、約27%上昇している。将来推計によると、令和27年（2045）に約51%となり、今後も高齢化が進行することが予測される。

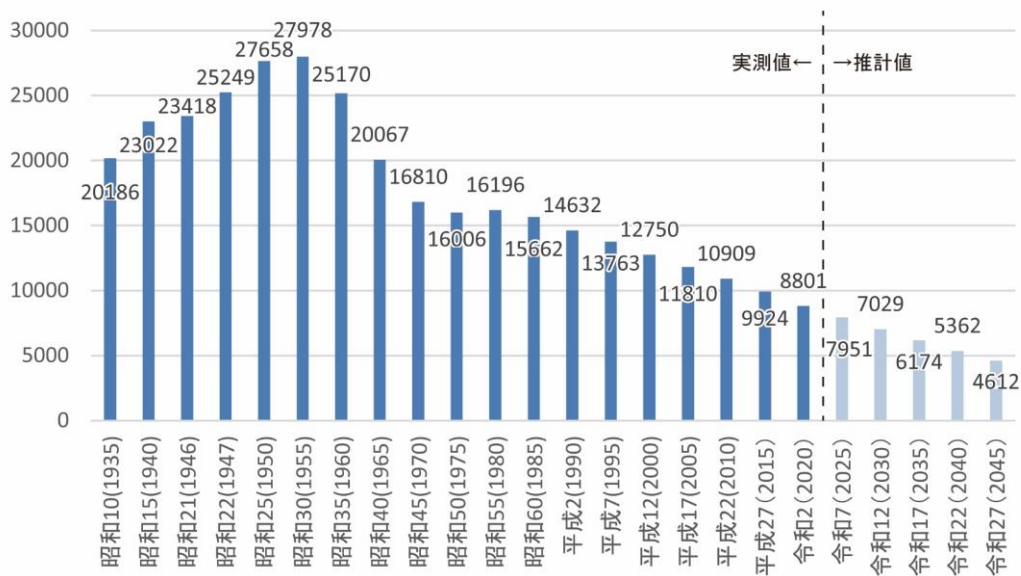


図 人口の推移（資料：国勢調査、日本の地域別将来推計人口（平成30年（2018）、国立社会保障・人口問題研究所））



図 年齢区分別人口の推移（資料：国勢調査、日本の地域別将来推計人口（平成30年（2018）、国立社会保障・人口問題研究所））

(3) 交通

本町は、北部以外の三方向を山に囲まれ、昔から他地域との交通のため峠道が発達しており、国道500号や県道78号、県道451号等が整備され広域的な主要道路の役割を担っている。

広域の公共交通である鉄道は、小倉駅（福岡県北九州市）から日田駅（大分県日田市）を結ぶJR日田彦山線（城野～夜明間）が南北を縦断し、町内に5つの駅を有している。平成29年（2017）7月の九州北部豪雨により添田駅から日田駅の間が被災したが、その後整備が行われ、令和5年（2023）8月にBRT（バス高速輸送システム）の運行が開始された。本町内は添田駅から彦山駅の間は一般道を走行し、彦山駅から宝珠山駅（福岡県東峰村）の間はBRT専用道を走行する。

鉄道以外の公共交通機関はバスがあり、本町と田川市を結ぶ川崎町経由の西鉄バス筑豊株式会社の1路線がある。町内の公共交通の手段として添田駅を中心としたコミュニティバスが巡回しており、学生や高齢者等の移動手段として広く利用されている。

また、英彦山の参道に、英彦山花園から英彦山神宮奉幣殿まで、スロープカーが整備され、英彦山を参詣する人々に利用されている。

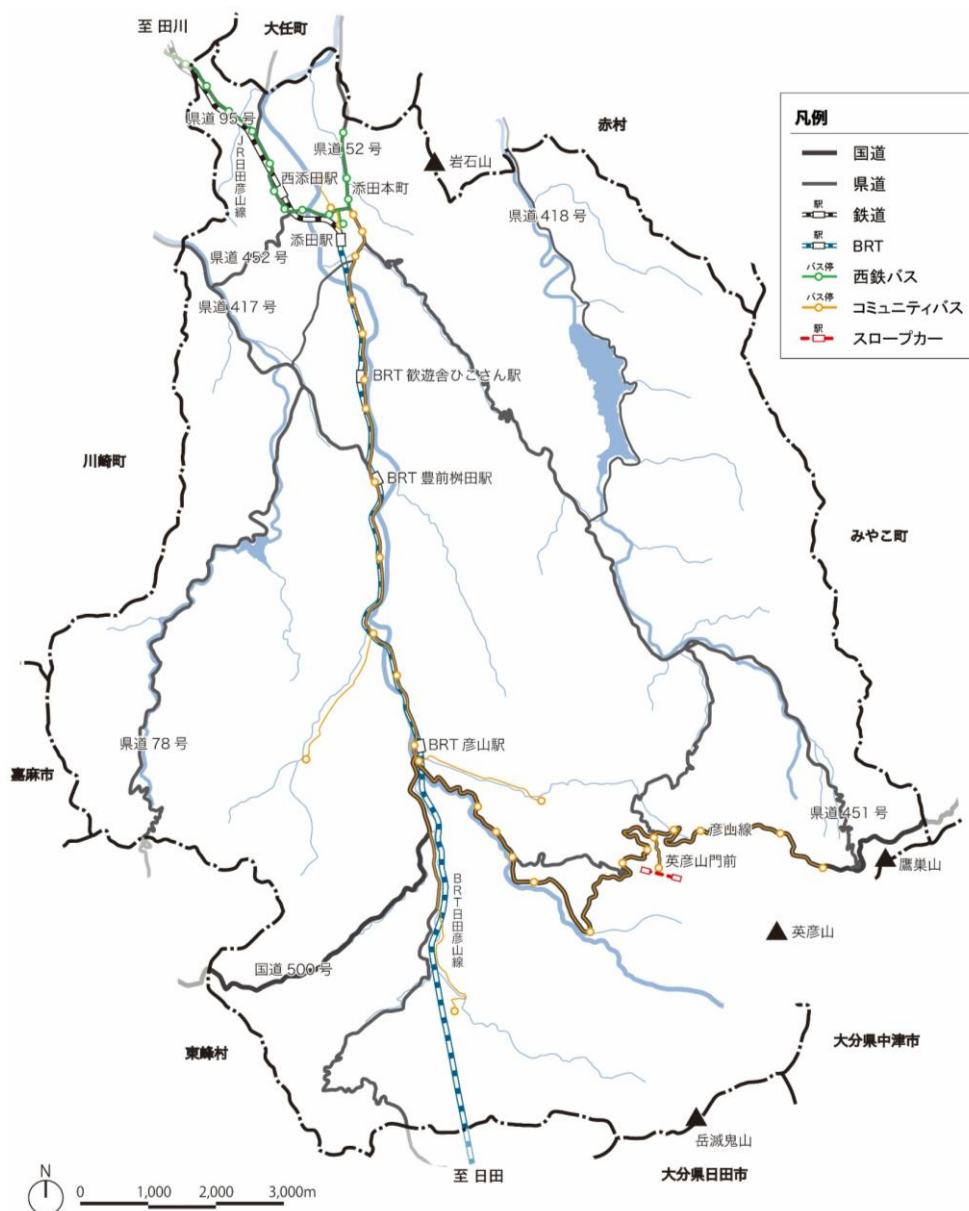


図 交通網

(4) 観光施設、文化財関連施設

本町は、有数の観光資源である英彦山を擁するとともに、観光振興としてバーベキュー等のアウトドアが満喫できる英彦山野営場や、ドライブオアシスと物産販売所を兼ね備えた道の駅歓遊舎ひこさん、観光客の宿泊施設であるひこさんホテル和等の多種多様な施設が整備されている。

文化財関連施設は、英彦山修験道に関する国指定の文化財等が展示されている英彦山修験道館、坊舎である財蔵坊を利用した添田町歴史民俗資料館、英彦山スロープカー花駅に設けられた山伏文化財室、添田公園内の添田町美術館岩石城がある。また、国指定の文化財である中島家住宅と旧数山家住宅は一般公開されており、中島家住宅ではひな人形や絵画等の展示や囲碁大会等のイベントも行われている。

主要な公民館はオークホール、中元寺公民館、津野公民館、彦山地区総合センターの4つあり、歴史講座等が行われる。そのほか、町内に地域の公民館が37箇所ある。

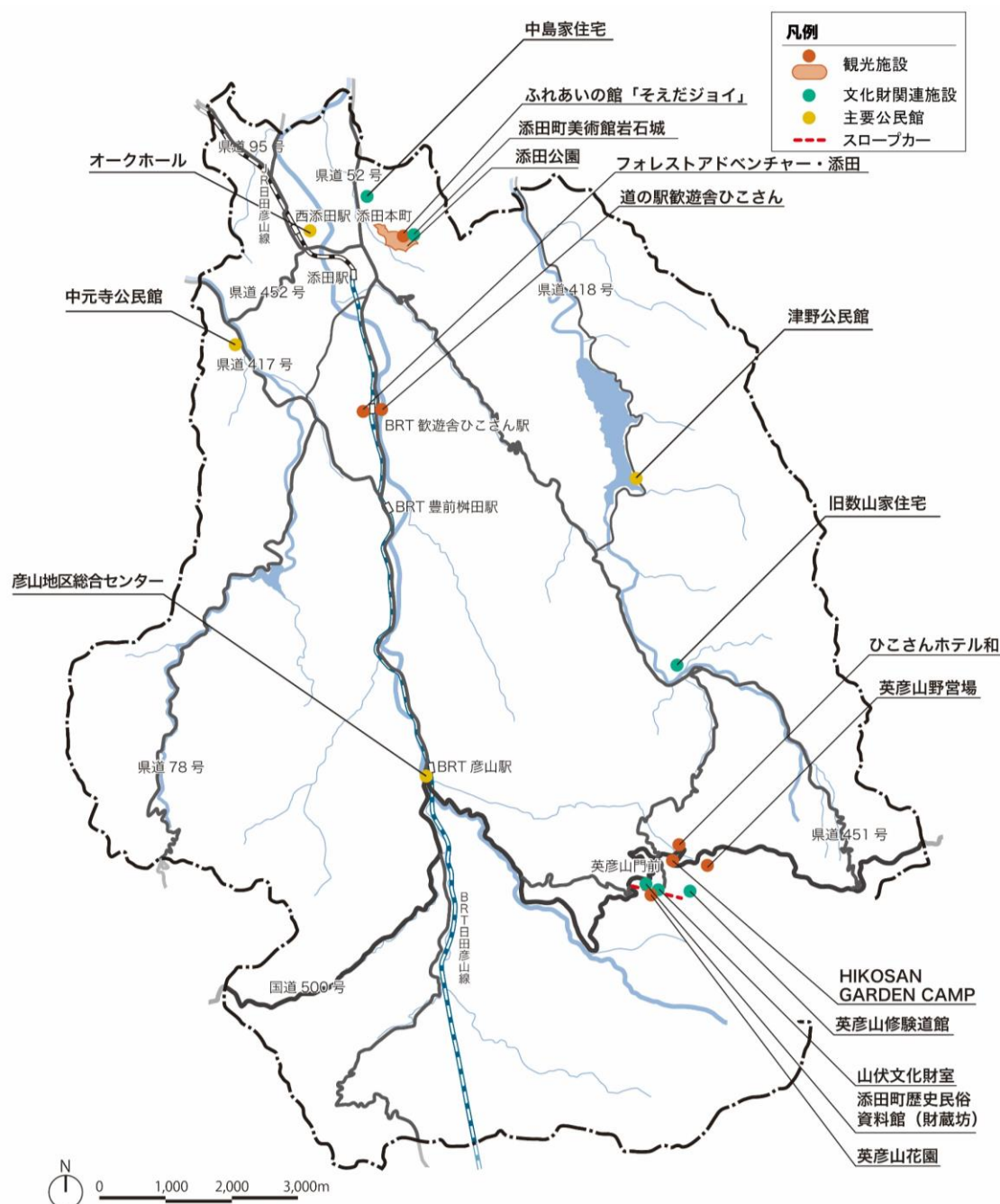


図 観光施設、文化財関連施設

3. 歴史的環境

(1) 原始

1) 狩猟と採集による人々の営み

本町の南に、遠賀川、今川等北部九州の大型河川の源流をなす英彦山が位置し、豊かな自然に育まれて縄文時代から狩猟と採集による人々の営みの痕跡が確認されている。

英彦山麓の津野地区、桝田地区の河川域に面した扇状地に多くの住居跡等を配した縄文遺跡があり、津野地区の下井遺跡でイノシシ捕獲用の落とし穴遺構が発見されている。

そのほかにも、津野地区の後遺跡の土壌墓から出土したヒスイ製大珠は、遠く1000kmも離れた新潟県糸魚川からもたらされたもので、当時の人々の交易の広さを示すものである。



後遺跡のヒスイ大珠

2) 大陸からの技術導入

弥生時代になると金属器生産が活発となり、本町でもいち早く大陸からもたらされた青銅器生産が開始されている。庄地区の丘陵に所在する庄原遺跡は弥生時代中期の初期青銅器生産遺跡であり、弥生時代の本町に高い技術を持った人々が暮らしていた。庄原遺跡からは、金属溶解炉跡や周溝状工房跡等の工房遺構とともに銅 鉈 の鋳型が出土している。銅鉈は木材の表面成形をする工具で、古代中国の楚 (B. C. 230頃) の領域に多く見られ、古代朝鮮半島の墳墓や日本の有明海沿岸部の遺跡を中心にみつかる。このことは、本町においても当時の人々が大陸と文化的、技術的な交流をもっていたことを示している。



庄原遺跡の金属溶解炉跡

3) 遠賀川上流域の古墳群

本町で古墳時代の集落等の生活の痕跡を示す遺跡は確認されていないが、彦山川沿岸域で9基の高塚式古墳と20基の横穴墓が発見されている。このうち、野田古墳(野田地区)と岩瀬古墳群(庄地区)、土器横穴群(庄地区)が現存する。これらは、遠賀川上流域に位置しており、古墳文化が内陸最深部まで及んでいたことがわかる。



岩瀬古墳 (岩瀬2号古墳)

(2) 古代

1) 彦山の開山と興隆

彦山の開山は様々な説があり、継体天皇25年(531)に北魏^{ほくぎ}の僧である善正^{ぜんしょう}による開山説が伝えられるほか、8世紀初めの役小角^{えんの おづめ}の入峯説や、その門流^{じゅげん}の寿元^{じゅげん}による天平6年(734)の開山、また豊前^{ぶぜん}宇佐^{うさ}出身^{うさ}で宇佐神宮^{うさじんぐう}弥勒寺^{みろくじ}の別当^{べっとう}法蓮^{ほうれん}による弘仁13年(822)の修験開祖説等がある。

彦山の名称の由来は、祭神である天忍穗耳命^{あめの おしほのみみこと}が日の神である天照大神^{あまてらすおほみかみ}の子であることから「日子山」と呼ばれていたが、弘仁10年(819)、嵯峨天皇が「日子」の2文字を「彦」に改める詔勅を下し、「彦山」となったと伝わる。

開山以降、聖域である山内において、山伏は「即身仏^{そくしんぶつ}」となるために厳しく修行した。平安時代に末法思想が広まると山頂に多くの経塚^{きやうづか}が営まれ、彦山が信仰を集めていたことがわかる。

10世紀に僧侶や山伏らが次第に組織化され、修験寺院「彦山霊仙寺^{ひこさんりやうぜんじ}」として強大な勢力を持った。また平安中期以降、神は仏の仮の姿であるという権現思想、神仏習合が世の中に広まると、彦山権現信仰が生まれた。

彦山はやがて天台系修験道の霊場として成長し、その名声は京都の朝廷にも届いていた。



彦山開山縁起絵
(江戸時代、英彦山神宮所蔵)

2) 荘園の成立

律令制下の国郡里制において、本町は豊前^{たがわ}国田河郡^{ちがひ}雉怡郷^{ちがひ}に含まれ、時代を経るなかで現在の町域は各地の寺社荘園に組み込まれて発展した。

「宇佐神宮領大鏡^{うさじんぐうりやうおおかがみ}」(鎌倉時代)は、中元寺から川崎町の安真木^{あまぎ}にかけた一帯を「虫生庄^{むしおしょう}」と呼んでおり、大宰府領であった。その後、永長2年(1097)、宇佐弥勒寺に寄進されたと伝えられており、後に中元寺荘となった。

本町の中元寺地区で奈良時代から平安時代の地方官庁跡とみられる遺跡が発見されており、中元寺地区の中元寺薬師堂に恵心僧都が安置したという平安時代後期の薬師如来坐像(県指定有形文化財)が現存する。また、永承2年(1047)に後冷泉天皇^{ごれいぜい}の勅願によって太宰府天満宮安楽寺の金堂が建立される^{てんのう}とき、「副田庄^{そえだのそう}」等が寄進されたと伝わる。



中元寺薬師堂薬師如来坐像
(平安時代後期、上中元寺区所蔵)

(3) 中世

1) 彦山修験道の成立

鎌倉時代初期までに、彦山の山内集落や修行形態が完成した。

また、これまでの仏教的色合いから転じて、神幸祭や御田祭という神事的祭事の「松会」と称する祈年祭行事が、一月から二月に最も多く組み込まれていたことがわかっている。現在行われている柱松神事や御潮井採り、御田祭、神幸祭は、この神事に由来するものである。

「彦山諸神役次第」(文安2年(1445))に室町時代に彦山で三季入峯が始まったことが見え、吉野と熊野を結ぶ大峰奥駈道を手本として彦山での「峯入り」が定まった。その様子が『英彦山大権現松会之図』(寛政年間(1789~1801))に伝えられている。



図 峯入行事【出典：英彦山大権現松会之図（寛政年間（1789～1801）、英彦山神宮所蔵）】

2) 彦山の最盛期

平安時代以降、山伏が増加すると、僧侶を指導者として宗教的な規範や教義を習得して組織化し、それを統括する彦山座主を輪番制で選出する、自治的な統治が行われるようになった。しかし、元弘3年(1333)に、後伏見天皇の第6皇子の長助法親王が彦山座主の助有として着座すると、彦山座主は世襲制となり、明治時代初期の英彦山修験道の終焉まで存続した。このこともあり、彦山は室町時代に九州の中心的修験道教派としての地位を確立して発展を遂げた。

しかし戦国時代に入ると彦山は周辺の戦国大名の干渉にさらされ、永禄11年(1568)と天正9年(1581)に、大友氏の武力侵攻を受け、多くの堂舎を焼失して壊滅状態となった。さらに豊臣秀吉が神領を没収すると、彦山は一時衰退し、法灯消滅の危機を迎えた。

3) 岩石城の築城と廃城

岩石山は山伏の行場であったが、筑紫地域の要城として、保元3年(1158)に大宰貳平清盛の命により、大庭景親が山頂を主郭とする城館である岩石城を築いた。岩石城は花崗岩の巨石奇岩と急峻な山容で構成され、細川忠興の書状に「天下一之城」と記された要城であった。築城以降、菊池氏、大友氏、大内氏、秋月氏に攻められ、帰属の変更を繰り返しながら、重要な城として存続した。天正15年(1587)4月、豊臣秀吉の九州平定に際し、島津方秋月氏の支城であった岩石城は前田利長、蒲生氏郷らの攻防により一日にして落城した。その後、小倉城の付城として豊前領主毛利勝信や細川忠興が支配したが、慶長20年(1615)の一国一城令により廃城となった。

(4) 近世

1) 彦山の再建と「英彦山」命名

彦山は江戸時代に各地の大名の庇護の下に再興し、大講堂(現、英彦山神宮奉幣殿)の再建と銅鳥居^{かねのとり}の建立を機に、その2つを結ぶ参道周辺に多くの坊舎が置かれ、門前が完成した。檀家は九州一円に広がり、その数は42万戸にも達した。山伏の数も更に増加し、800もの坊と3,000人もの衆徒が山中に集った。参詣者も増加し、2月の松会祈年祭に8万人もの参詣があった。

また、「彦山」の名称は、享保14年(1729)、霊元法皇^{れいげんほうおう}から「英」の一字を賜り、読みはそのまま表記は「英彦山」となった。



英彦山神社奉幣殿（重要文化財）

2) 英彦山への往来による街道筋の繁栄

英彦山への「英彦山詣^{ごんげんこう}で」が盛んとなり、「英彦山権現講」と称して多くの参詣者を集めた。英彦山詣でにより、小倉城下と天領日田から英彦山に至る街道である通称「日田道^{ひたちみち}」が発達した。小倉藩主の細川忠興は独自の行政制度である「手永^{てなが}」制を導入し、日田道街道筋の添田地区の添田本町^{そえだほんまち}に「添田手永」を置いた。これにより、添田本町に大庄屋の中村家を核として多くの町家ができた。また、酒醬油の醸造業等が盛んとなり、櫛蠟製造等も営まれた。

英彦山詣での参詣者は、筑前^{ちくぜん}、豊前、筑後、日田天領の各方面から郡境・国境の峠を越え、英彦山に到達した。俗に「英彦山七口^{ななくち}」と呼ばれる、7つの参詣口である。添田本町から英彦山落合口^{おちあいくち}に向かう道中の野田地区に「高札場^{こうさつば}」と茅葺の趣のある野田庄屋の宮田家がある。宮田家はかつては英彦山松会参詣の草鞋替えの場所として、「草鞋接待^{わらじ}」の幟を掲げていたといい、その風格を留めている。現在は、観光や登山として英彦山へ参詣する人も多くなったが、権現講等の伝統的な参詣行事の風習が残る地区もある*。

また、英彦山の神領を明確にすることを目的として大行事社と呼ばれる神社が周辺に置かれ、現在は津野地区の2社と落合地区の1社が明治初期に「高木神社^{たかぎじんじや}」と名称を変えて残っている。津野地区の高木神社で御潮井採りや神幸祭と神楽等の、落合地区の高木神社で神幸祭と獅子楽等の、英彦山と縁の深い祭りが今も執り行われている。

3) 英彦山修験道の終焉

江戸時代後期になると、度重なる飢饉等の社会不況や大火災等で山伏社会は衰退した。幕末に急進派の山伏が長州奇兵隊と結び、尊皇攘夷^{そんのうじやうい}へと傾倒し、座主^{きやうゆう}教育は攘夷祈禱を發願した。この不穏な動きを察知した小倉藩により、文久3年(1863)、多くの山伏を小倉の獄に繋ぐ「英彦山義僧事件」が起こった。

明治維新を迎え、神仏分離令^{しんぶつぶんりれい}に因り、英彦山座主^{きやうゆう}の教育は僧籍を返上し、「英彦山霊仙寺^{ひこさんじんじや}」を「英彦山神社」に改称した。ここに英彦山修験道は終焉した。

* 現在でも佐賀県神埼地方で毎年2月15日に「大島の水かけ祭り」として権現講を行っており、祭りの後、直会で代参者を決めて御田祭などに参詣している。

(5) 近・現代

1) 炭坑による繁栄

明治維新後、近代化に向けた殖産政策として官営八幡製鐵所が創業され、石炭需要が拡大し、筑豊各地に次々と炭鉱が開業した。筑豊炭田は軍需拡大に伴って国内第一の産出量を誇った。本町においても明治18年(1885)に峰地炭坑^{みねじたんこう}の採掘が始まり、大正時代までに峰地三坑等が開坑した。

英彦山は明治時代以降、門前町の旅館を中心に炭鉱就業者の保養所として賑わい、添田地区も商業施設が拡充し、峰地炭鉱のあった上添田駅(現、添田駅)周辺に映画館、劇場等の娯楽施設も整備された。

しかし、新エネルギー革命期を迎え、昭和36年(1961)の峰地一坑の閉山を機に炭坑は衰退し、昭和44年(1969)にすべての炭坑が閉山した。



昭和20年代(1945～1954)の峰地炭鉱 峰地一坑全景

2) 炭坑閉山後

炭坑閉山後は、炭坑就業者の人口流出や地下坑道陥没の影響による地盤沈下等の問題が発生したため、地場産業の振興を図るとともに、家屋や田畑等への鉱害復旧事業を行い、ボタ山や炭坑住宅は全て取り壊された。炭鉱という主要産業を失った本町は、豊富な自然を生かした林業、水はけのよい中元寺地区^{きんぼろ}の金の原台地での畑作農業^{かき}、花卉栽培等が地場産業の中心となり、今日に至る。

一方、豊かな自然と悠久の歴史を育んできた英彦山は、昭和25年(1950)、「耶馬日田英彦山国定公園」として国内最初の国定公園に選定されると、昭和40年(1965)に町営国民宿舎「ひこさん」、昭和46年(1971)に県立「英彦山青年の家」が開所し、多くの観光客で賑わった。

鉄道は小倉駅から彦山駅まで開通していたが、昭和31年(1956)に日田彦山線(城野駅から夜明駅まで)が開通し、これにより、英彦山の登山口としての彦山駅の年間乗降客は、昭和31年(1956)に18万人を越えた。

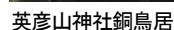
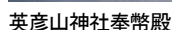
このように観光振興に力を入れる一方、治水・利水の観点から昭和46年(1971)に「油木ダム」を、昭和50年(1975)に「陣屋ダム」を完成させ、農林業や工業等の産業と住環境の改善を図っている。

平成以降も観光業に力を入れており、英彦山においては、平成17年(2005)の「英彦山花園」の開園と合わせて「英彦山スロープカー」の運行が開始された。平野部においては、平成11年(1999)にふれあい物産センター「歓遊舎ひこさん」を開業し(平成17年(2005)に道の駅として開駅)、平成20年(2008)にJR日田彦山線に「歓遊舎ひこさん駅」が開業した。近年は、令和2年(2020)にキャンプ施設「HIKOSAN GARDEN CAMP」が、令和5年(2023)に自然共生型アウトドアパーク「フォレストアドベンチャー・添田」が開業した。このように、豊かな自然と英彦山を中心とする歴史と文化を活かした取組みが進められている。

本町は、さまざまな種別の指定文化財を有しており、国指定の文化財と福岡県指定文化財（以下、県指定の文化財）、添田町指定文化財（以下、町指定の文化財）を合計すると32件の指定文化財が存在する（令和7年（2025）8月現在）。多くの指定文化財は、英彦山修験道に関する文化財であり、「英彦山神社銅鳥居^{ひこさんじんじやかねのとりい}」や「英彦山神社奉幣殿」等の社殿、山伏の坊舎等の有形文化財が英彦山周辺に分布している。英彦山の麓に、英彦山への往来により形成された日田道の町家建築や集落の農家住宅等の有形文化財（建造物）が分布している。これらの文化財は、英彦山修験道が興隆した中世から神仏分離により終焉を迎える近世までを物語る文化財である。なお、町内においては指定・登録された無形文化財、選定された文化的景観及び伝統的建造物群は所在しない。また、記録作成等の措置を講ずべき無形文化財及び無形の民俗文化財の選択はない。そのほか、文化財の保存技術の選定はない。

大分類	中分類	国指定・選定	国選択	県指定	町指定	国登録	計	
有形文化財	建造物	4	－	1	1	0	6	
	美術工芸品	絵画	0	－	0	0	0	0
		彫刻	0	－	1	1	0	2
		工芸品	2	－	1	0	0	3
		書跡・典籍	1	－	0	0	0	1
		古文書	0	－	0	0	0	0
		考古資料	1	－	0	0	0	1
		歴史資料	0	－	0	0	0	0
無形文化財		0	0	0	0	0	0	
民俗文化財	有形の民俗文化財	0	－	4	0	0	4	
	無形の民俗文化財	1	0	0	1	0	2	
記念物	遺跡	1	－	1	2	0	4	
	名勝地	1	－	0	0	0	1	
	動物、植物、地質鉱物	2	－	4	2	0	8	
文化的景観		0	－	－	－	－	0	
伝統的建造物群		0	－	－	－	－	0	
合 計		13	0	12	7	0	32	

有形文化財は13件あり、内訳は国指定8件、県指定3件、町指定2件である。建造物は国指定のものに英彦山地区の「英彦山神社奉幣殿」、「英彦山神社銅鳥居」、英彦山に至る街道沿いに添田地区の「中島家住宅」、津野地区の「旧数山家住宅」がある。そのほか、英彦山に関連するものを中心に国指定の「しゅげんいたおい修験板笈」や「ひこさんさんしとごんげん みしょうたい彦山三所権現御正体」等の工芸品や書跡・典籍、考古資料がある。





中島家住宅



旧数山家住宅



修験板笈



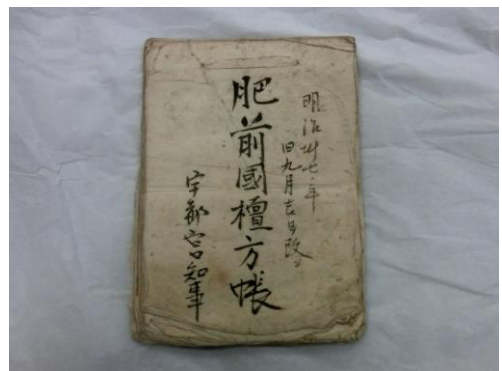
彦山三所権現御正体

2) 民俗文化財

民俗文化財は6件あり、その内訳は国指定1件、県指定4件、町指定1件である。有形の民俗文化財は4件あり、主なものに坊舎を含む県指定の「英彦山資料」と「英彦山楞嚴坊修験資料」がある。無形の民俗文化財は2件あり、津野地区に伝わる「津野神楽」が国指定の「豊前神楽」の1つとして指定されているほか、英彦山門前でお盆に踊られる町指定の「彦山踊り」がある。



財蔵坊（英彦山資料の一部）



英彦山楞嚴坊修験資料



津野神楽（豊前神楽）



彦山踊り

3) 記念物

記念物は13件あり、その内訳は国指定4件、県指定5件、町指定4件である。遺跡は、「英彦山」が約90haの面積で国の史跡に指定されているほか、庄地区の弥生時代の遺跡である県指定の「庄原遺跡」や山伏の墓地である町指定の「英彦山大河辺山伏墓地」、野田地区の町指定の「野田の高札場」がある。名勝地は、英彦山内にある複数の庭園が「英彦山庭園」として国の名勝に指定されている。動物、植物、地質鉱物は、強度の異なる地質が隣接し、浸食によって柱状の丘を形成するビュート地形である「鷹巣山」が国の天然記念物に指定されているほか、落合地区、津野地区の植物等がある。



英彦山



野田の高札場



英彦山庭園（旧亀石坊庭園）



鷹巣山

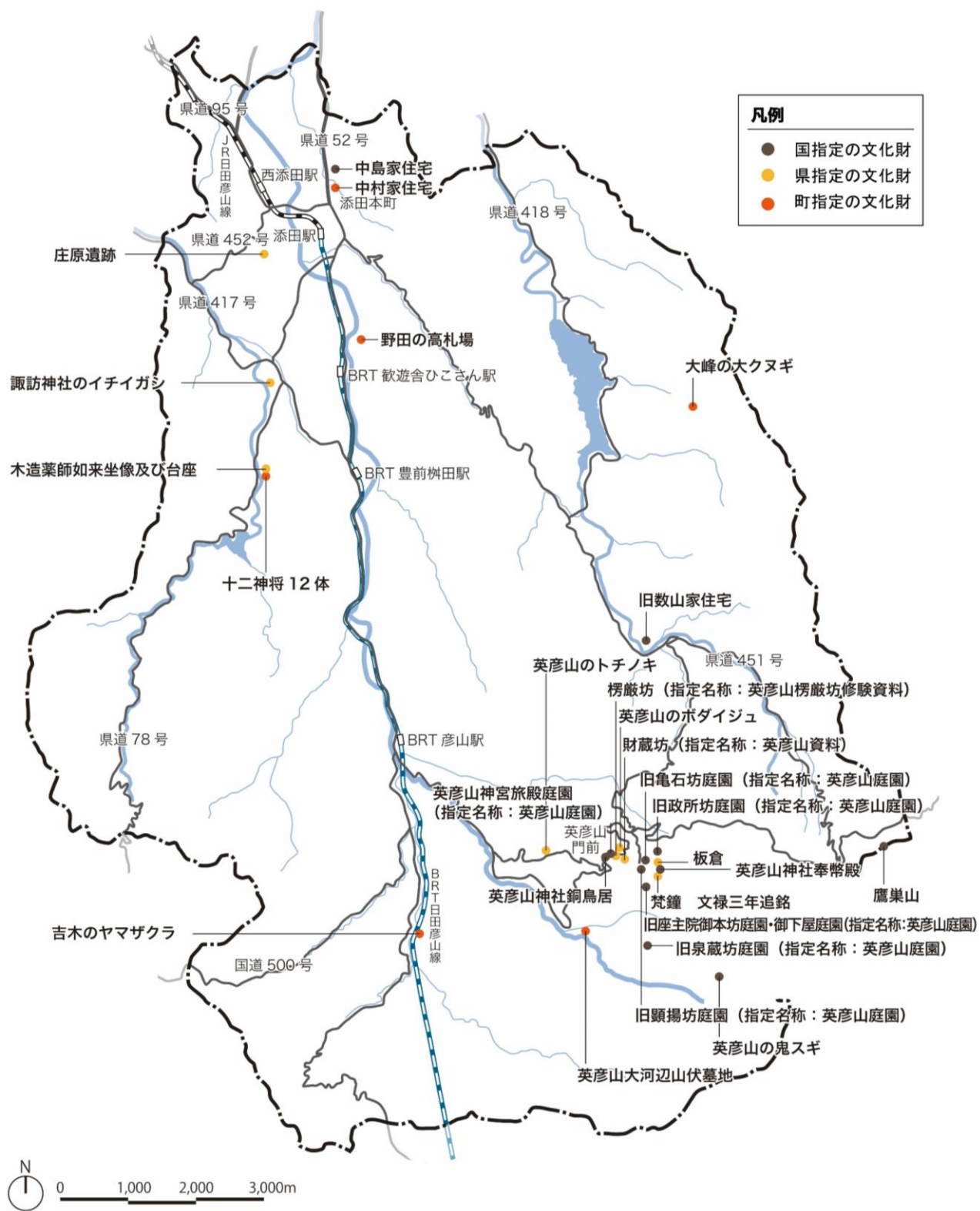


図 主な指定等文化財の位置

(2) 未指定文化財

本町は、これまでに文化財の把握と価値付けに取り組み、重要性の高いものは、指定による保護を図ってきた。これまで把握してきた指定等文化財以外の未指定・未登録の文化財（以下、未指定文化財）は、令和7年（2025）8月現在814件である。

表 未指定文化財件数（令和7年（2025）8月現在）

大分類	中分類		計
有形文化財	建造物		44
	美術工芸品	絵画	120
		彫刻	78
		工芸品	27
		書跡・典籍	99
		古文書	9
		考古資料	2
		歴史資料	1
無形文化財		0	
民俗文化財	有形の民俗文化財	260	
	無形の民俗文化財	51	
記念物	遺跡	46	
	名勝地	48	
	動物、植物、地質鉱物	4	
文化的景観		0	
伝統的建造物群		0	
埋蔵文化財		25	
文化財の保存技術		0	
合 計		814	

1) 有形文化財

建造物は44件である。英彦山門前に、かつての山伏の活動拠点である「正賢坊」等の坊舎、「英彦山神宮旅殿」等の社殿、「花山旅館」等の旧旅館がある。英彦山門前の周辺に、英彦山の東の玄関口であり、牛馬信仰により多くの参詣者を集める「高住神社」がある。

また、英彦山への往来により形成された添田地区の日田道沿いに、「岩城家住宅」等の町家建築や「旧添田銀行」等の洋館建築、「御成門」等の歴史的建造物が今日も残されており、家屋の多くは今日も住居として使用されている。

そのほかの各地区の日田道沿いやその周辺部の集落にも神社があり、「上津野高木神社」や「添田神社」等の神社で、現在も神幸祭をはじめさまざまな祭礼や民俗芸能が行われている。

建造物以外の有形文化財は、絵画120件、彫刻78件、工芸品27件、書跡・典籍99件、古文書9件、考古資料2件、歴史資料1件である。その多くは英彦山地区にあり、英彦山修験道に関連する文化財で、英彦山修験道館、山伏文化財室や坊舎等に展示・保管されている。例として、俯瞰図絵師である吉田初三郎が英彦山を描いた「英彦山霊山図」や鎌倉時代初期「神将形立像」、英彦山修験

道で用いられた「^{きょうつくえ}経机」、^{ごうちょうりっし}豪潮律師による書「^{なむあみだぶつ}南無阿弥陀佛」、英彦山座主を務めた高千穂家の
「^{たかちほかみけもんじょ}高千穂上家文書」、江戸時代の添田本町の町割り等が記される「^{おおえず}大絵図」がある。

【英彦山門前周辺の建造物】



正賢坊



花山旅館



高住神社

【添田地区の日田道沿いの建造物】



岩城家住宅



旧添田銀行



御成門

【各地区の神社】



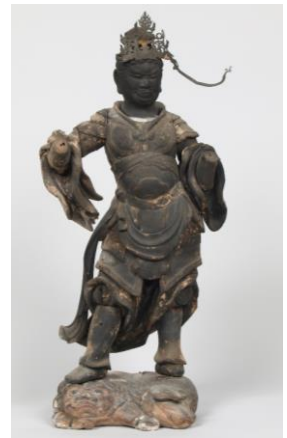
上津野高木神社



添田神社



英彦山霊山図（昭和8年（1933）、英彦山神宮所蔵）



神将形立像（鎌倉時代後期、英彦山神宮所蔵）



経机（天保10年（1839）、英彦山神宮所蔵）



書「南無阿弥陀佛」（江戸時代、添田町所蔵）



高千穂上家文書（添田町所蔵）



大絵図（添田町所蔵）



銅鉋鑄型（添田町所蔵）

2）民俗文化財

有形の民俗文化財は260件あり、英彦山修験道に関係するものが多く、英彦山地区の板碑や庚申^{こうしん}碑、供養塔等がある。

無形の民俗文化財は51件あり、英彦山地区における祭礼が多く、そのほかに各地区で継承されている祭礼や民俗芸能、工芸品、食文化、物語・伝承がある。

英彦山修験道の中心的な行事である松会祈年祭として行われた「柱松神事^{はしらまつしん じ}」、「御田祭^{おん た さい}」、「神幸祭^{こうさい}」の一連の神事や、御田祭、神幸祭に先駆けて山中祓いを行うための「御潮井採り^{おしおい と}」といった行事が開催時期や形を変えつつも当時の面影を保ちながら今日まで厳粛に執り行われている。

そして、農耕の予祝祭^{よしゆくさい}として行われる英彦山から始まる神幸祭は、水の流れとともに下流域に広がるように、時期をずらしながら各集落で行われる。神幸祭において、国指定の文化財である津野神楽のほか、「野田獅子楽^{の だし し がく}」や「落合獅子楽^{おちあい し がく}」のような民俗芸能が奉納される地区もある。神幸

祭を終えると、里山の各地で田植えがはじまる。また、添田地区の添田神社の神幸祭は、英彦山にまつわる神幸祭と祇園祭の流れを汲むもので、昼は「ヤマ」と呼ばれる山車に稲穂を象ったバレンを飾り付けて日田道を巡行し、夜はバレン飾りを提灯に付替え、祇園祭の山鉾山車として町内を廻っている。

そのほか、英彦山の東の玄関口に位置する高住神社は、牛馬の守神として信仰をあつめ、万物成就を願う「神幸祭（豊前坊丑日祭）」が執り行われる。神幸祭での六角神輿の御神幸や牛くじは、英彦山の秋の風物詩となっている。そのほか、英彦山に伝承されてきた修験道の修法として、「豊前坊採燈護摩供」が今日まで受け継がれており、高住神社の境内で執り行われている。

また、町指定の文化財である彦山踊りの流れを汲む落合、津野地区の「松坂踊り」や、落合、中元寺地区の「ひよひよ踊り」が、盆踊りとして伝承されている。

地域の工芸品は、約800年の歴史を持つ土鈴であり、英彦山詣での際に持ち帰る風習のある「英彦山がらがら」、修験道の山伏とイメージが結びついた天狗をモチーフとする「英彦山面」が現在もつくられている。

食文化は、「柚子こしょう」、「豆腐」、「おひら」がある。柚子こしょうは、英彦山の坊舎の柚を利用して考案・販売した本町の「柚乃香」が元祖といわれている。豆腐は英彦山の坊舎や旅館等で振舞われたもので、現在も英彦山の清水を使い、昔ながらの製法で作られている。おひらは昆布やかまぼこ、タケノコ、タイを使った伝統料理であり、英彦山権現講等において振舞われる。



柱松神事



御潮井採り



御田祭



神幸祭



野田獅子楽



落合獅子楽



添田地区の神幸祭



神幸祭（豊前坊丑日祭）



豊前坊採燈護摩供



英彦山がらがら



英彦山面（天狗面）



柚子こしょう



豆腐



おひら

3) 記念物

遺跡は46件あり、英彦山地区の坊舎跡、石塔類、修行窟が多く、そのほかに各地区に存在する古墳や寺跡、城跡等の遺跡がある。

名勝地は48件あり、その多くは「門坊庭園」等の英彦山門前の庭園である。

動物、植物、地質鉱物は4件あり、英彦山地区の「材木石」、「ヒコサンヒメシヤラ」、中元寺地区の「諏訪神社境内の勝木の森」、添田地区の「市場堂御旅所の楠の木」がある。



門坊庭園



材木石

4) 埋蔵文化財

埋蔵文化財は25件あり、津野地区の「後遺跡」等の縄文時代の集落跡、「野田古墳」等の古墳、縄文時代から鎌倉時代までの複合遺跡である中元寺地区の「宮ノ前遺跡」や「観音寺遺跡」がある。

(3) 関連する制度

1) 添田町歴史的風致維持向上計画

「地域における歴史的風致の維持および向上に関する法律（通称：歴史まちづくり法）」第5条に基づき策定した計画であり、第1期計画が平成26年(2014)5月に、第2期計画が令和6年(2024)3月に主務大臣より認定を受けた。この計画では、本町の維持向上すべき歴史的風致として、6つのテーマに分類した上で12の歴史的風致を挙げ、英彦山区域（英彦山地区）と添田本町等区域（添田地区）を重点区域に設定し、歴史的風致の維持向上に取り組んでいる。

また、重点区域内に位置し、歴史的風致を形成し、歴史的風致の維持向上のために保護を図る必要があると認められる建造物を「歴史的風致形成建造物」として指定し、その保護に向けた取り組みを進めている。

表 添田町の歴史的風致（資料：「添田町歴史的風致維持向上計画（第2期）」（令和6年（2024））、添田町）

1. 英彦山神宮にまつわる歴史的風致	1－1. 柱松神事にみる歴史的風致
	1－2. 御潮井採りにみる歴史的風致
	1－3. 御田祭にみる歴史的風致
	1－4. 神幸祭にみる歴史的風致
2. 添田本町地区と神幸祭にみる歴史的風致	
3. 英彦山水系流域と民俗芸能にみる歴史的風致	3－1. 津野神楽にみる歴史的風致
	3－2. 落合獅子楽にみる歴史的風致
	3－3. 野田獅子楽にみる歴史的風致
4. 彦山踊りにみる歴史的風致	
5. 英彦山権現講をはじめとする英彦山詣でにみる歴史的風致	
6. 高住神社にまつわる歴史的風致	6－1. 神幸祭（豊前坊丑日祭）にみる歴史的風致
	6－2. 豊前坊採燈護摩供にみる歴史的風致

表 歴史的風致形成建造物指定候補（資料：「添田町歴史的風致維持向上計画（第2期）」（令和6年（2024））、添田町）

番号	名称	所在地 (地区)	指定区分
1	英彦山神宮参道（町道1号）	英彦山	—
2	正応坊	英彦山	—
3	中村家住宅	添田	町の指定文化財
4	宮崎家住宅	添田	—
5	御成門	添田	—
6	花山旅館	英彦山	—
7	富士屋旅館	英彦山	—
8	正賢坊	英彦山	—
9	中央旅館	英彦山	—
10	白梅旅館	英彦山	—
11	高住神社	英彦山	—

5. 文化財に関する既往の把握調査

(1) 文化財把握調査の実施状況

これまでに、福岡県教育委員会を中心に、民家や社寺、近代化遺産等の建造物、古文書、民謡や民俗芸能、近年に祭り・行事や窯業関係遺跡等、全県域を対象とする様々な文化財調査が実施されている。

また、添田町教育委員会を中心に、「英彦山総合調査報告書」（平成28年（2016））をはじめとし、英彦山周辺の建造物や民俗文化財、庭園等の調査が行われてきた。そのほか、添田町教育委員会は遺跡調査を中心に個別の文化財調査を実施している。

本町域で実施された文化財に関する主な調査報告は以下のとおりである。

表 本町域で実施された文化財に関する主な既往調査報告

番号	書籍名	発行者	発行年	備考
1	史蹟名勝天然記念物調査報告書 第七輯	福岡県	昭和7年 (1932)	記念物
2	福岡県史蹟名勝記念物調査報告書	福岡県	昭和42年 (1967)	記念物
3	津野 福岡県田川郡添田町津野地区民俗資料緊急調査報告書	田川郷土研究会	昭和42年 (1967)	民俗文化財
4	福岡県の民家 緊急調査報告書	福岡県教育委員会	昭和47年 (1972)	建造物
5	昭和47年度英彦山民俗資料緊急調査報告書 英彦山の民俗	添田町教育委員会	昭和48年 (1973)	民俗文化財
6	九州の石塔-福岡県の部	福岡県教育委員会	昭和49年 (1973)	有形文化財
7	福岡県古文書等所在確認調査報告書	福岡県文化会館	昭和52年 (1977)	有形文化財
8	『福岡県遺跡等分布地図』田川市・田川郡編	福岡県教育委員会	昭和52年 (1977)	遺跡
9	山伏の住む英彦山 英彦山伝統的建造物群保存地区調査概要	添田町教育委員会	昭和53年 (1978)	古文書・古記録
10	英彦山・求菩提山仏教民俗資料緊急調査報告書	元興寺文化財研究所	昭和53年 (1978)	民俗文化財
11	福岡県の近世社寺建築 近世社寺建築緊急調査報告書	福岡県教育委員会	昭和59年 (1984)	建造物
12	英彦山修験道遺跡 福岡県添田町所在英彦山修験道遺跡の調査	添田町教育委員会	昭和60年 (1985)	遺跡
13	福岡県民俗地図 緊急民俗文化財分布調査報告書	福岡県教育委員会	昭和56年 (1981)	民俗文化財
14	福岡県の民謡 民謡緊急調査報告書	福岡県教育委員会	昭和62年 (1987)	民俗文化財
15	福岡県の諸職 福岡県諸職関係民俗文化財調査報告書	福岡県教育委員会	平成2年 (1990)	民俗文化財
16	福岡県の民俗芸能 福岡県民俗芸能緊急調査報告	福岡県教育委員会	平成4年 (1992)	民俗文化財
17	福岡県の近代化遺産 日本近代化遺産総合調査報告	福岡県教育委員会	平成5年 (1993)	建造物、遺跡
18	庄原遺跡 発掘調査概報	添田町教育委員会	平成6年 (1994)	遺跡
19	添田町文化財調査報告書 第3集 英彦山大河辺山伏墓地	添田町教育委員会	平成8年 (1996)	遺跡
20	福岡県の絵馬 歴史資料調査報告書	福岡県博物館協議会	平成9-12年 (1997-2000)	歴史資料
21	薬師遺跡 県営園場整備事業(担い手育成型)落合・桝田地区に伴う発掘調査	添田町教育委員会	平成17年 (2005)	遺跡
22	津野遺跡群 県営中山間地域活性化基盤整備事業(遊農津野地区)に伴う発掘調査	添田町教育委員会	平成19年 (2007)	遺跡

番号	書籍名	発行者	発行年	備考
23	中元寺遺跡 1 県営経営体育成基盤整備事業（中元寺地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査	添田町教育委員会	平成 21 年 (2009)	遺跡
24	中元寺遺跡 2 県営経営体育成基盤整備事業（中元寺地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査	添田町教育委員会	平成 22 年 (2010)	遺跡
25	榊田遺跡 経営園場整備事業(担い手育成型)落合・榊田地区に伴う埋蔵文化財発掘調査	添田町教育委員会	平成 23 年 (2011)	遺跡
26	豊前神楽調査報告書	福岡県文化財調査研究委員会	平成 24 年 (2012)	民俗文化財
27	平成 25 年度英彦山建造物調査	榊河上建築事務所	平成 26 年 (2014)	建造物
28	福岡県の中近世城館跡 福岡県中近世城館遺跡等詳細分布調査報告書 3	福岡県教育委員会	平成 28 年 (2016)	遺跡
29	英彦山総合調査報告書（本文編）	添田町教育委員会	平成 28 年 (2016)	有形文化財、民俗文化財、記念物等
30	英彦山総合調査報告書（資料編）	添田町教育委員会	平成 28 年 (2016)	有形文化財、民俗文化財、記念物等
31	知恩寺跡 福岡県田川郡添田町添田所在遺跡の調査/県道英彦山添田線改良事業関係埋蔵文化財調査報告	九州歴史資料館	平成 29 年 (2017)	遺跡
32	福岡県の近代和風建築 福岡県近代和風建築総合調査報告書	福岡県教育委員会	平成 30 年 (2018)	建造物
33	英彦山庭園調査報告書	添田町教育委員会	平成 31 年 (2019)	遺跡
34	福岡県の戦争遺跡	福岡県教育委員会	令和 2 年 (2020)	建造物、遺跡
35	福岡県の祭り・行事 福岡県「祭り・行事」調査事業	福岡県教育委員会	令和 6 年 (2024)	民俗文化財
36	福岡県の近世窯業関係遺跡	福岡県教育委員会	令和 6 年 (2024)	遺跡

(2) 既往調査の成果と課題

前記の把握調査および本計画における整理により、町内に所在する文化財の分類ごとの把握調査の実態を以下にまとめる。建造物及び書跡・典籍以外の類型はすべて一部調査のみにとどまっており、全体的な把握調査が必要となっている。特に、無形の民俗文化財は、少子高齢化により継承が危ぶまれるものがあることが想定され、調査の緊急性と重要性が高いといえる。

表 文化財の把握状況

大分類		中分類	状況
有形文化財	建造物		○
	美術工芸品	絵画	△
		彫刻	△
		工芸品	△
		書跡・典籍	○
		古文書	△
		考古資料	△
		歴史資料	△
無形文化財			△
民俗文化財	有形の民俗文化財		△
	無形の民俗文化財		△
記念物	遺跡		△
	名勝地		△
	動物、植物、地質鉱物		△
文化的景観			○
伝統的建造物群			○
埋蔵文化財			△
文化財の保存技術			○

○：調査済 △：一部調査済 ×：調査未実施